OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	接続詞分類の上位概念 ： 「したがって」「つまり」「このように」を通した一考察
Author(s)	伊藤, 光史
Citation	日本語・日本文化研究. 2014, 24, p. 136-147
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51018
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

接続詞分類の上位概念
―「したがって」「つまり」「このように」を通した一考察―

伊藤　光史

1.　はじめに

以下はある大学の入学試験問題（国語）における設問（本文は除く）である。

空欄［　1　］～［　3　］に入る語として、最も適当なものを次の中から選べ。

イ　いうまでもなく

ロ　さらに

ハ　つまり

ニ　たしかに

ホ　すなわち

これはある文章の中の一部が空欄になっていて、そこに当てはまる接続詞を選ぶという問題である。学校教育における国語の試験ではこの手の問題がよく出題される。文脈をしっかり読み取れているか確かめるためにこのような出題をしているのだろうが、「文の前後がどういう関係性にあるか」ということは唯一的なものなのだろうか。またそこに挿入される接続詞はそんなに明白に決まりきっているものなのだろうか。

本稿では先行部を前提として後続部で判断を下す[1]関係性を文連接における広義的意味機能として提案し、前提と判断の関係を結ぶ接続詞を一つの枠組みとして捉える。この観点から従来タイプの違うとされている接続詞が潜在的に共通性を持っていることを主張する。また潜在的な共通性を見出す糸口として、ある文脈で複数の接続詞が文章の前後を結ぶことができる現象を取り上げる[2]。

2.　接続詞について

2.1 本稿での接続詞の取り扱い

本稿では接続詞を「後続部が先行部とどのような関係性にあるかを明確にする機能を持つもの」と定義づける。品詞における接続詞は一般に語の範疇に収まるものだけを指しており、その認定の範囲は狭い。しかし接続詞は他品詞からの転成によってできているものがほとんどで元々はいくつかの語の集合である場合が主である。例えば「そして」であれば、

「そ」（「そう」という指示語の「う」が脱落したもの）

＋「し」（動詞「する」の連用形）

＋「て」（助詞「て」）

という語構成になっており、これを一語と呼べるのは文法化が進んだ結果によるものである。すなわち通時的に元の語の意味を希薄にして獲得した性質である。ということは品詞として挙げられている接続詞は文法化が顕著で、比較的形式化して使用されるようになった表現だけを選別したものに過ぎず、それらを接続詞の全体と呼ぶのは不十分である。本稿では先述した接続詞の定義に当てはまり、接続を本務とする表現は一貫して接続詞と呼ぶこととする。ただし、文章は前の文との関わりによって形成されており、基本的に後の文は前の文と繋がりを持ちながら連続している。そのため何を持って「接続を本務とする」のかは別途考える必要があるが、本稿では紙幅の都合上詳しくは論じないこととする。

本稿では文頭で使用される接続詞のみを考察の対象とする。よって文の途中に生じる接続詞については取り上げない。これは文以上の単位をつなぐ接続詞を観察するためである。接続詞は語と語のような小さなまとまりをつなぐ場合があり、この時文の途中に接続詞が現れる。しかしこのような接続はすべての接続詞において可能な訳ではない。一方どのような接続詞であっても文頭で使用することは可能である。また文中に現れる接続詞は、接続助詞との境界がはっきりとしない場合も存在する。以上の観点から、文中の接続詞を取り上げると、目的以外の事象についても紙幅を費やすため扱わないこととする。

2.2 接続詞の分類

接続詞はその接続の仕方によってタイプ分けがなされている（永野（1959）、塚原（1968）、塚原（1970）、市川（1978）、日本語記述文法研究会（2009）等）。研究者によってラベル名や分類の仕方に多少の異同はあるが、例えば順接、逆接、累加、換言といったラベルがある（(1)〜(4)）。

(1) 玄関で物音がした。だから私は恐る恐る寝室のドアを開けた。（順接:先行部を原因とした結果が後続部で示される。）

(2) 祖父が病死し、私は悲嘆にくれた。しかし涙は出なかった。（逆接:先行部の内容に反した事柄が後続部で示される。）

(3) ガソリンの価格が高騰した。その上、高速道路の料金も値上げされた。（累加:先行部の内容に後続部で付け加えをする。）

(4) 肉体労働は体力が必要だし、オフィスワークは目や頭が疲れ、肩も凝る。つまり働くというのは楽ではないのだ。（換言:先行部を後続部で言い換える。）

塚原（1970）は「形態的な連接機能の対象となる領域と意味的な連接機能が対象となる領域とは、一致することもあれば、一致しないこともある」（p.12）、「意味的な機能領域は接続詞の個体において択一的に定着するのではなく、前後の表現との相対性で規定される」（p.13）という指摘をしている。塚原のいう形態的な連接機能というのは先述した順接、逆接、累加、換言などのラベル名のことを指し、意味的な連接機能というのは、実際の文章上で接続詞がどのような関係性を結んでいるかということを指すものだと考えられる。

筆者の理解によれば、塚原（1970）の指摘はラベル名から考えられる前後の結びつきの範囲と実際文章の中で接続詞が結んでいる範囲は必ずしも同じとは限らないということだと思われる。

(5) (A)心ある介護スタッフは、入所者がこれまでの「暮らし」のなかで使いなれた茶碗や箸を施設にもってくるよう「指導」する。洗う側からすれば、割れやすい陶器製の茶碗より施設が供するプラスチックのコップのほうがいいに決まっているが、それでも使いなれた茶碗を奨める。(B)割れやすいからていねいに持つ、**つまり**、(C)身体のふるまいに気をやる機会を増すことで「痴呆」の進行を抑えるということももちろんあろう。が、(D)それ以上に、身体を孤立させないという配慮がそこにはある。

(5)では(B)「割れやすいからていねいに持つ」の言い換えを「つまり」の後で示している。言い換えに当たる部分は(D)の「身体を孤立させないという配慮」だと考えられる[3]。形態的な結びつき（換言という機能における結びつき）を考えれば、「つまり」は(B)と(D)をつなぐものだと考えられるが、意味的な結びつき（文章を理解する上で関連性を持つ結びつき）を考えれば(A)や(C)が関わることとなる。塚原（1970）は領域という点においての指摘に留まっていたが、領域だけでなく、接続詞が文上でどのような意味を持って使用されているかということや語をつなぐのか文をつなぐのかという性質的特徴などあらゆる点においてラベル名が絶対的に個々の接続詞を定義づけるものではないことが予測できる。

3. 接続詞の取り替え可能現象

3.1 取り替え可能現象の概要

(6) Google では、例えば会社名で検索すれば、たいていはその会社のホームページが一番先頭に検索されてくる。（したがって／つまり）、検索結果が表示されれば、すぐに目的のホームページを発見できる。

(7) 縫製される製品が、ハンガーに吊られたまま、ミシン台まで引っぱられて、次々と縫われていく。（つまり／したがって）、束ねなおして次の工程に運ぶような手間がないわけだ。

(6)の原文では「したがって」が、(7)の原文では「つまり」が使用されている。しかし、接続詞を「したがって」と「つまり」で取り替えてみても先行部と後続部を結ぶことができる。このように、ある文脈で複数の接続詞が文章の前後を結ぶことのできる現象を接続詞の取り替え可能現象[4]と呼ぶ。

3.2 取り替え可能現象を取り上げる意義

一般に同じタイプとして分類されている接続詞間では、取り替え可能現象が比較的起こりやすい。2.2 で挙げた(1)～(4)を(1)'～(4)'に変えても、伝わるニュアンスは異なるが、非文法的な表現にはならない[5]。

(1)’ 玄関で物音がした。それで私は恐る恐る寝室のドアを開けた。
(2)’ 祖父が病死し、私は悲嘆にくれた。だが涙は出なかった。
(3)’ ガソリンの価格が高騰した。しかも、高速道路の料金も値上げされた。
(4)’ 肉体労働は体力が必要だし、オフィスワークは目や頭が疲れ、肩も凝る。言い換えれば働くというのは楽ではないのだ。

だが「したがって」「つまり」という二表現は一見すると接続のタイプが異なる接続詞のように思われる。

(8)　鹿児島は火山灰土の土壌である。したがって稲作には適さない。
(9)　彼はどんな仕事にも時間がかかる。つまり要領が悪いのだ。

「したがって」は順接というラベル名が付けられることが多く(8)では先行部を根拠にして後続部で結論を下すといった関係を結んでいる。「つまり」は換言というラベル名で、(9)では先行部を後続部で言い換えている。タイプとして異なる表現にも関わらず(6)、(7)のように接続詞の取り替えができるというのは内在的に二つの接続詞に共通性があるからではないかと考えられる[6]。グルーピングされると、タイプの違う接続詞は「異なったもの」という印象が強くなる。逆に同じタイプの接続詞は個々の性質の差が見えにくくなる。接続詞が取り替えられるかという判定は接続詞同士の共通性や相違点を見出すために有効である。例えば違うタイプの接続詞がある文脈で取り替えできれば共通性を想定できるし、同じタイプでもある文脈で取り替えできなければ個々の特徴差を考えるきっかけとなる。

3.3 「したがって」「つまり」の共通性

では「したがって」「つまり」の共通性について具体的に検討していきたい。先に結論から述べると「したがって」と「つまり」は先行部を前提として後続部で判断を下す関係性を結ぶ点で共通していると考えられる。本稿では「前提」は「判断を行うために必要な条件的事象」、「判断」は「前提を元にして書き手が解釈[7]を加えて考えを示すこと」という意味で使用する。この二つの表現は相補的な関係性を持つ語として規定する。

「したがって」の意味機能は市川（1978）「前の内容を条件とするその帰結を導く」、永野（1959）「前の事がらを原因・理由とする結果や結末が、次にくることを表す」、日本語記述文法研究会（2009）「後続部が先行部が原因で生じた結果であることを表す」等の説明がされており、論理的関係性を結ぶ接続詞と考えられる。先行部は後続部で示される事がらの条件、原因、理由といった前提事項と言えるし、後続部は先行部の前提を元に導き出された判断だと言える。

一方「つまり」の意味機能は「同列」（市川（1978））、「換言」（日本語記述文法研究会（2009））といった語で説明されており、後続部が先行部の言い換え、同内容であることが特徴として示されている。石黒（2001）では「つまり」の性格を「送り手の解釈を加えて、受け手にとって理解しやすいと思われる表現に言い換える」ものだと説明している。

(9)の例で言えば「仕事をするのに時間がかかる」という具体的事象を、彼の「要領が悪い」という性質として言い換えしている。「仕事をするのに時間がかかる」という事象から例えば彼の性質は「何にでも没頭する人だ」とも「丁寧だ」とも導き出すことが可能で書き手は様々な解釈ができる。しかしその中から「要領が悪い」という性質を選択したところに受け手への理解を容易にする送り手の解釈が加わっており、本稿での「判断」に合致する。このような観点から「つまり」も[先行部：後続部]の関係性を[前提：判断][8]として結ぶと考えてよいだろう。

再掲(6)　Google では、例えば会社名で検索すれば、たいていはその会社のホームページが一番先頭に検索されてくる。（したがって／つまり）、検索結果が表示されれば、すぐに目的のホームページを発見できる。

(6)では先行部が「会社名の検索→会社のホームページが表示される」という具体例で Google 検索の特徴を示し、後続部でその特徴がどのような性質を持つのか、すなわち「検索結果から目的のページをすぐに発見できる」という Google 検索全体における共通の性質を示している。先行部の例示を元に後続部では数ある Google 検索の性質の中から一つの性質を示している。そこに書き手の解釈が加わっている。そのため先行部と後続部は[前提：判断]関係にあると言える。

再掲(7)　縫製される製品が、ハンガーに吊られたまま、ミシン台まで引っぱられて、次々と縫われていく。（つまり／したがって）、束ねなおして次の工程に運ぶような手間がないわけだ。

(7)については先行部が工場での細かい作業工程の記述で、それを後続部で「手間がかからない作業」という解釈に結びつけている。先行部の事象から後続部である考えを示していることから(7)の例も接続詞の前後が[前提：判断]の関係にあると考えられる。以上の観点より「したがって」と「つまり」が[前提：判断]関係をつなぐという共通した性質を持つために(6)、(7)で取り替え可能現象が起こったというのが筆者の考えである。

3.4 「したがって」と「つまり」の相違

3.3 では「したがって」と「つまり」の共通性について考えたが、そもそもこの二表現はラベル名が異なる接続詞である。そのため本来はタイプの違う接続詞として分類されている。もちろん「したがって」と「つまり」の取り替え可能現象はすべての文脈で起こるわけではなく、二表現の相違点についても見ていきたい。

「したがって」は換言の機能を持たない点で「つまり」と異なる。そのため、たとえ先行部を前提として後続部で判断を行うような文脈であっても、「先行部を後続部で言い換える」といった換言性が強い場合、「したがって」は使用できない。換言性の強さについては「先行部＝後続部」という関係性が容易に想像できるかどうかが条件となる。

(10) 息子はこれから自分の生活費は自分で稼ぐと宣言した。(つまり／??したがって)、もう親のスネはかじらないというのだ。(原文の接続詞：つまり)

(11) わたしたちはもう一つ別の「考える」をもっている。例えば，これまで当然そうだと思っていたことに対して，本当にそうなのか，なぜそうなのかと問いなおしてみたり，あるいは日ごろの生活をふり返って，こんなことでよいのかと考えたりする場合である。(つまり／*したがって)，これまでの自分の考え方，生き方を反省するという意味で考える場合である。(原文の接続詞：つまり)

(10)において先行部では「自分の生活費を自分で稼ぐ」という「息子の行為」の一つを挙げ、後続部で「その行為が何を意味するのか」という書き手の解釈の部分が示される。ここには 3.3 で見てきた[前提：判断]の関係性があると思われる。しかし、(10)で注意すべき点は先行部が「〜と宣言した」、後続部が「〜というのだ」という形式を取っているところである。「宣言する」というのは何かを声に出して「言う」ことに他ならないため、前後は「〜と言う」の意味で一致しており、「言い換えられたもの」という認識が強くなる。そのため換言の機能を持たない「したがって」は挿入できないと考えられる。

(10)' 息子は自分の生活費を自分で稼ぐようになった。(つまり／したがって)、もう親のスネはかじらないのだ。

そのため(10)'のように(10)から「〜と言う」の対応関係を取り払うと「したがって」の許容度が上がる。(11)でも先行部、後続部と同様に「〜場合である」という形を取っており、前後で言い換えが行われたことが形として明示的である。そのため「したがって」を挿入すると非文となると考える[9]。(10)、(11)のように読み手が前後の関係を捉える際に「先行部＝後続部」であることが容易に連想できる要因があることで「したがって」の許容度が下がる。

(12) 子どもが，親と長期にわたって密な関係をもつのは，一人前の人間として高度の発達をとげるために非常に多くのことを身につけなければならないからである。親の援助を受けながらそれに取り組むには長い期間が必要である。(したがって／??つまり)，どのような親子関係の中で育つかは，子どもの発育発達，人格形成に大きな影響を与える。(原文の接続詞：したがって)

反対に(12)では「つまり」の許容度が低い。その理由は「先行部＝後続部」の関係性が見えにくいからである。(12)は先行部で「子どもは長期的に親と関わる」ことを述べ、後続部で「親子関係のあり方によって子どもがどう発達するかは変わってくる」と結論づけている。

「親子は長い時間を共に過ごす」(先行部：前提)
→「子どもは親の影響を長時間受けることになる。」(思考活動)
→「親子関係のあり方（親の影響の与え方）によって子どもがどう発達するかは変わってくる。」(後続部：判断)

先行部から後続部へ行き着くためには上で示した思考活動が必要である。そのため先行部から一足飛びに後続部へ行き着くことはできない。先行部と後続部の論理的飛躍が大きければ大きいほど先行部と後続部をイコールで結ぶことができず、「つまり」の許容度は下がる。

3.5「このように」との取り替え可能現象

(13) 地球のような固体表面をもつ天体には，クレーターが存在する。一方，木星や土星は水素とヘリウムを主成分とする大気でおおわれている。木星や土星と天王星・海王星は，地球などとくらべて非常に大きく，固体の表面をもたない惑星である。（このように／したがって／つまり）太陽系の惑星は，地球のような固体表面をもつ比較的小さい惑星と，木星のような惑星の２つのタイプに分けられる。前者を地球型惑星，後者を木星型惑星という。両者はその表面や大きさだけでなく，いろいろな点で異なっている。（原文の接続詞：このように）

(13)は「このように」が「したがって」「つまり」と取り替えできる例である[10]。「このように」は先行部をまとめて後続部で示す特徴を持つ。つまり先行部の要素から書き手が必要な部分を抽出して後続部で示すこととなる。先行部のどの点を抽出するかという段階で書き手の解釈が加わっており、「したがって」、「つまり」と同様に[前提：判断]の関係を結ぶ性質を持つと言える。また「このように」は「まとめ」の機能を持つことから先行部の内容が言い換えられたものが後続部で示されることとなる。そのため「つまり」のように換言の性質も備わっていると考えられる。ただし「したがって」や「つまり」と相違する点として、先行部に複数の要素を必要とすることが挙げられる。先行部の要素が一つだけではそもそもまとめる必要が無いためである。そのため(13)のように先行部で「地球のような天体」と「木星・土星のような天体」といったように複数の要素が挙げられていなければならない[11]。

(14) 野球部の鈴木は走るのが早い。肩の力もある。動体視力もずば抜けて高い。（したがって／つまり／??このように）彼は外野手向きなのだ。

(14)は先行部に「野球部の鈴木」の具体的な能力として複数の要素がある。そこから「野球選手」として一つの特性を示していることから先行部と後続部は[前提：判断]の関係性を持つと言える。だが「このように」だけ許容度が低い。ところで(14)は「外野手向きなのだ」という判断に行き着くまでに①、②、③という思考の流れが必要になる。

野球部の鈴木は走るのが早い。肩の力もある。動体視力もずば抜けて高い。
→①彼は運動能力が高い。（+外野手は敏捷性、肩力、動体視力が必要という予備知識）
→②彼は外野手としての能力に長けている。
→③彼は外野手向きだ。

①は先行部で示された「鈴木の特性」を一つにまとめて言い換えたものである。その部分に「外野手は敏捷性、肩力、動体視力が必要という予備知識」を備えていれば、②のようにさらに言い換えを行うことができる。②から導き出される判断として③のように「外野手向きだ」という後続部内容が示される。「このように」は下記の(14)'のように先行部と①や②を結ぶことは可能である。

(14)' 野球部の鈴木は走るのが早い。肩の力もある。動体視力もずば抜けて高い。このように、(彼は運動能力が高い／彼は外野手としての能力に長けている)。

3.4 で「つまり」は先行部と後続部の論理的飛躍が大きすぎると許容度が下がると述べたが、許容できる飛躍の幅が「このように」はさらに狭いと考えられる。この原因として「このように」は「この」という指示語を含んでいることが挙げられる。「この」が先行部を指し示すために、後続部は「先行部のように」という前置きの上で述べられなければならない。そのためより一層「言い換えされたもの」であることが後続部に求められる。

4. 接続詞分類の上位概念

4.1 [前提：判断]タイプの接続詞

3 章で見たように「したがって」「つまり」「このように」の三表現は[前提：判断]の関係性を結ぶ点で共通しており、ある文脈でこの三つの接続詞を取り替えて使用できることがわかった。このことは「順接」、「換言」、「まとめ」といったようなラベル名が接続詞の主になる特徴を示しているだけで、グループの違う接続詞同士でも潜在的に共通した性質を持っている可能性を示唆している。

先行部を前提として後続部で判断を下す関係性を結ぶ接続詞は他にも考えられうる。例えば「とすると」、「ならば」のように先行部である状況を仮定し、後続部でその状況下で想定される事がらを述べる仮定条件の接続詞である。ある状況下で想定される事がらを述べるということはいくつもある事がらの中から一つの事がらを書き手が選び取ることになるので先行部を「前提」とし、後続部で「判断」がなされていると言える。

(15) 「森林を伐採する」ということには悪いイメージがあるが、健康な森を作るために木を間引く場合がある。木々全体に日光を当てるための工夫である。<u>とすると</u>森林伐採が必ずしも悪という訳ではない。

また論理関係を無視し、後続部の内容が示されると言われている「いずれにしても」、「とにかく」といった接続詞でも[前提:判断]の関係性を示すことができる[12]。

(16) 不登校が開始されるときは，予定どおりではない。前に触れたが，不登校のきっかけについて，不登校体験者の半数以上が，学校内の人間関係の不調をあげている。「学業の不振」を不登校のきっかけとする者も 3 割弱あった。<u>いずれにしても</u>，学校環境への合わなさが不登校の引き金になる。

(16)では先行部で「不登校が始まる理由は「人間関係の不調」または「学業の不振であ

る」」とし、それを根拠に後続部で「学校環境に合わないことが不登校の引き金になる」と述べている。「人間関係の不調」、「学業の不振」という先行部の内容から「学校環境に合わないことが不登校の引き金になる」と後続部で判断が行われている。ただし強引に判断へと結びつけている印象を与えるため、単に[前提：判断]という関係性だけではない意味が付加されている点で独自性がある。

「さもないと」「そうしないと」等の否定条件を示す接続詞は先行部の前提を欠いた場合の判断が後続部で示される。

(17) 夜食をやめ、炭水化物も控えるべきだ。さもないと肥満になる。

このような接続詞も先行部を前提とし、後続部で判断を行っていると言える。今まで挙げてきた[前提：判断]を結ぶ接続詞と異なる点は前提を欠いた場合どうなるかを示している点にある。そのため他の[前提：判断]タイプの接続詞とは少し性質が異なる。

4.2 考察

接続詞にはそれぞれ意味機能によって一般にラベル名がつけられていることは 2.2 で述べた。同じラベル名のグループ内ではその意味的な共通性や相違点を考えることがあっても、ラベル名の違うものはそもそも比較されることが少ない。なぜならそれらは意味上全く別種の接続詞であり、そこには意味的に重なる部分は存在しないと考えられるからである。だが、これは「ラベル名が接続詞の意味機能を全体として規定している」という仮定の元に成り立つ考えである。確かにラベル名の部分はその接続詞の特徴的な部分を説明するものだが、３章を通してラベル名だけでない[前提：判断]という意味機能を接続詞が持つことが示された。そもそもラベル名は過去から踏襲されているものもあれば、研究者によって分類の仕方やラベル名が異なる場合もあり[13]、絶対的な区分ではない。本稿では[前提：判断]という関係性において潜在的な共通性を主張したが、同様に他の接続詞にもラベル名では説明し切れない意味的特徴を持つものだと仮定できる。[前提：判断]を結ぶという特徴は「順接」「換言」「まとめ」などといったラベルよりも広義の意味機能であり、多種の接続詞が該当する。潜在的な共通性というのはラベル名よりも上位概念的な共通性と捉えてもよい。仮にラベル名が異なっていたとしても、上位概念として意味的な共通性があるならば、その中での共通性、相違点を検討することには大変意味があるように思われる。３章で比較した「したがって」「つまり」「このように」はその一例である。

5. おわりに

元々「したがって」「つまり」「このように」といった表現に類似性を感じていたのが本研究の発端である。そのぼんやりと感じていた共通性を少しでも根拠を持って説明するために今回は接続詞が取り替えできるかどうか、またその時にどのような共通性を持っているかを考察した。上記の三表現において見出した共通性に合致するものをさらに追加し、

[前提：判断]関係を結ぶ接続詞という一つの枠組みを提案したことが本稿での最も重要な主張である。だが、接続詞には語構成の違い（指示語の有無など）の問題、一度ラベリングされた接続詞の共通性や相違点を考える上で未解決の部分も少なくない。本稿での考察を一つの出発点とし、更なる分析を行う必要があることは自戒の念を込めて記しておかなければならない。

【用例出典】[14]

(5)鷲田清一（2005）「身ぶりの消失」『X-Knowledge Home 特別編集 No.5 昭和住宅メモリーそして家は生きつづける。』エクスナレッジ社

(6)水野貴明（2004）『ＡＳＡＨＩパソコン』朝日新聞社

(7)伊藤隆太郎（2001）『ＡＥＲＡ』朝日新聞社

(10)日本語記述文法研究会（2009）『現代日本語文法 7』くろしお出版

(11)平木幸二郎ほか（2006）『倫理』東京書籍

(12)櫻井純子ほか（2006）『生活技術』教育図書

(13)松田時彦,山崎貞治ほか（2005）『高等学校地学Ｉ』啓林館

(16)小林正幸（2003）『不登校児の理解と援助』金剛出版

※(1),(2),(3),(4),(8),(9),(14),(15),(17)は筆者作例

※(6),(7),(11),(12),(13),(16)は「現代日本語書き言葉均衡コーパス」[15]より引用

【参考文献】

石黒圭（2001）「換言を表す接続語について―「すなわち」「つまり」「要するに」を中心に―」『日本語教育』110, pp.32-41, 日本語教育学会

市川孝（1978）『国語教育のための文章論概説』教育出版

井手至（1973）「接続詞とは何か――研究史・学説史の展望――」鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本語講座 6 接続詞・感動詞』pp.45-88, 明治書院

多田知子（2010）「複合接続詞――文の文頭部分の階層性――」『国文論叢』42, pp.15-28, 神戸大学文学部国語国文学会

田野村忠温（1990）「文における判断をめぐって」崎山理・佐藤昭裕編『アジアの諸言語と一般言語学』pp.785-795, 三省堂

塚原鉄雄（1968）「接続詞」『月刊文法』1-1, pp.39-43, 明治書院

塚原鉄雄（1970）「接続詞――その機能と特殊性――」『月刊文法』2-12, pp.10-18, 明治書院

永野賢（1959）『学校文法文章論』朝倉書店

日本語記述文法研究会編（2009）『現代日本語文法 7 第 12 部談話 第 13 部待遇表現』くろしお出版

野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則（2002）『日本語の文法 4 複文と談話』岩波書店

馬場俊臣（1993）「指示語系接続詞と指示語──「そうして、こうして」を例として──」『語学文学』31, pp.7-14, 北海道教育大学

ひけひろし（1996）「接続詞のはなし（2）──「それから」と「そして」──」『教育国語』2-22, pp.15-26, むぎ書房

山森良枝（1990）「接続詞の二類型と談話の情報構造──「つまり」と「だから」を手がかりに──」『日本語学』9-5, pp.84-101, 明治書院

註

1 「前提」「判断」という語の意味については 3.3 において詳述する。

2 本稿で取り上げるのは書き言葉のみである。したがって情報の送り手を「書き手」、情報の受け手を「読み手」と表記する。

3 言い換えにあたる部分は(C)の「「痴呆」の進行を抑える」ではなく、(D)の部分だと筆者は考える。(5)の文章では（介護施設で陶器製の茶碗を持たせることについて）「「痴呆」の進行を抑える」ことも目的としてあるだろうが、それより大きな目的として「身体を孤立させないという配慮」があるという論じ方をしている。すなわち書き手の論において必要な情報は「身体を孤立させないという配慮」の方であり、「割れやすいからていねいに持つ」という先行部の言い換えに該当する箇所にあたる。

4 山森（1990）、ひけ（1996）等、複数の接続詞がある文脈で取り替えられるという観点から考察を行った研究は過去にも散見される。また馬場（1993）では「置き換え可能性」という語を用いて複数の接続詞の「用法の重なりとずれ」を考察している。これらの論文はその場限りの考察方法としてこの操作を行っているが、本稿では接続詞全般に用いることができる手法と考えているため「接続詞の取り替え可能現象」という一つの章立てをして論じることとした。

5 日本語記述文法研究会（2009）の分類において、「それで」は「だから」と同じ順接タイプ、「だが」は「しかし」と同じ逆接タイプ、「しかも」は「その上」と同じ累加タイプ、「言い換えれば」は「つまり」と同じ換言タイプの表現である。

6 接続詞を取り替えてしまうとそもそも前後の関係性自体が変質して、全く別のことを言う文章となるという指摘も考えられる。例えば「カレーは美味しい。（そして／しかし）辛い。」という文章では「そして」の場合と「しかし」の場合で「辛い」に与えられる価値が全く異なる。だが、後続部の内容は「カレーの性質説明を追加する」という点では「そして」の場合も「しかし」の場合も共通している。その意味で「接続詞が取り替えられる」ということが性質として共通している部分があると考えられる。

7 解釈という語は広義的には「物事の意味を自分なりに理解、説明すること」といった意味で使用される。「自分なりに」という部分は漠然としたものだが、本稿では「前提部分から連想しうる数ある結論の中から書き手がある一つだけを選び出し、後続部で示す」、その行為を「解釈」と充てており、傍点部が「自分なりに」という意味の本稿での狭義的説明である。

8 以下先行部を前提とし、後続部で判断をする関係性を[前提：判断]関係と表記する。

9 「したがって」を挿入した場合の許容度を(10)は「??」、(11)は「*」とした。この理由として(10)は先行部、後続部の文末形式がそれぞれ「〜と宣言した」「〜というのだ」と一致はしていないが類似した形式、(11)では前後とも「〜場合である」と完全に一致した形式を取っている点の差異を考慮に入れたからである。

10 (13)において「したがって」「つまり」は「このように」に比べて許容度が低い（または「したがって」「つまり」は問題なく許容できるが「このように」が最も適するように感じる）とい

う意見も想定できる。この要因は「したがって」「つまり」が前後の要素を一対一で結ぶことができるのに対し、「このように」は先行部に複数の要素を必要とし、後続部でそれを一つに集約する点にあると考えられる。すなわち[複数の要素]→[一つの要素]という構造を取っていると「このように」の方がより適切だと感じられるのである。だが「このように」が使用される文脈で「したがって」「つまり」を挿入しても非文や相当に許容度の低い文とならないことから本稿では「取り替えができる」と記述している。

11 「このように」は指示詞「この」＋「ように」として使用される場合も存在し、この場合は「まとめ」の機能を持たず、具体的に一つのものを指示する形で使用される。

12 論理関係を無視するということは後続部の判断は一見、先行部を前提としないように思われる。しかし書き言葉、特に読み手に何らかの考えを伝えるような説明的な文章ではあえて自分の論理を破綻させることはしないはずである。(自分の考えと対立する考えを引用する場合はそれ破綻させることはある。) そのため説明的な文章においてこの類の接続詞が使用される時、むしろ先行部が、後続部で判断を行うために必要な前提となっていると筆者は考える。

13 永野（1959）、塚原（1968）、市川（1978）、日本語記述文法研究会（2009）を比較参照するだけでもその差異はわかる。

14 用例の半数程度は作例を用いている。実例は文章全体を見ないと内容がわからない場合があり、接続詞の前後だけを抜き出すだけでは不十分な用例が多数存在した。そのような事情から紙幅を考え、一部を作例で説明することとした。

15 検索の対象は 2000 年から 2008 年までの「出版・雑誌」「出版・書籍」「特定目的・教科書」とした。